慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	14世紀イスラームの医学観：『医学と医者が必要であることの証明』翻訳 (4)
Sub Title	Image of medicine in 14th-century Islam : Japanese translation of Bayān al-ḥāǧa ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbāʾ (4)
Author	矢口, 直英(Yaguchi, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.53 (2022. 3) ,p.311- 328
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000053-0311

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

14世紀イスラームの医学観：『医学と医者が必要であることの証明』翻訳(4)

矢　口　直　英*

Ⅰ．はじめに

本稿は、クトゥブッディーン・シーラーズィー Quṭb al-Dīn al-Šīrāzī（1236–1311年）による医療倫理書『医学と医者が必要であることの証明』*Bayān al-ḥāǧa ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbāʾ*の翻訳である。今回は、シーラーズィーが引用する他の医学者による助言のうち、イブン・ムトラーンIbn al-Muṭrān（1191年没）の『医者たちの庭園』*Bustān al-aṭibbāʾ*[1]（以下、『庭園』）から引用された箇所、校訂版45頁から60頁までを訳出する[2]。ただし、イブン・ムトラーンの文章自体がアブー・アラー・イブン・ズフルAbū al-ʿAlāʾ Ibn Zuhr（1130/31年没）[3]からの引用である。

東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員

1　Ibn Abī Uṣaybiʿa, *ʿUyūn al-anbāʾ*, II, 175–181; Ullmann, 165f.

2　⑴は『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第49号（2018）、235–249頁、⑵は同誌第51号（2020）、287–304頁、⑶は『イスラム思想研究』第3号（2021）、111–121頁に掲載。

3　Ibn Abī Uṣaybiʿa, *ʿUyūn al-anbāʾ*, II, 64; Ullmann, 162. イブン・スィーナーの『医学典範』がアンダルスに到達した際にその価値を否定した人物であり、アヴェンゾアルAvenzoarとして知られるアブー・マルワーン・アブドゥルマリク・ブン・ズフルAbū Marwān ʿAbd al-Malik ibn Zuhr（1161年没）の父親である。アブー・アラーの著作はColin, 17–38で刊行されているが、イブン・ムトラーンの引用に対応

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 53 号（2022）pp.311~328

本翻訳の底本として、Quṭb al-Dīn al-Šīrāzī, *Bayān al-ḥāǧa ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbāʾ, wa-ādāb-hum wa-waṣāyā-hum*, ed. Aḥmad Farīd al-Mazīdī (Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmīya, 2003)を使用した。また参照する文献として、以下のものを挙げる。

・Colin, C. *La Teḏkirà d'Abû 'l-ʿAlâ'*. Paris: Ernest Leroux, 1911.

・Hinz, W. *Islamische Masse und Gewichte: umgerechnet ins metrische System*. Leiden: E. J. Brill, 1955.

・Ibn Abī Uṣaybiʿa. *ʿUyūn al-anbāʾ fī ṭabaqāt al-aṭibbāʾ*. Ed. A. Müller. 2 vols. Cairo: al-Maṭbaʿa al-Wahbīya, 1882.

・Ibn al-Muṭrān. *Bustān al-aṭibbāʾ wa-rawḍat al-alibbāʾ*. Ed. ʿA. A. Šuwayrib. Tripoli: Ǧamʿīyat al-Daʿwa al-Islāmīya al-ʿĀlamīya, 1993.

・ʿĪsā, A. *Muʿǧam asmāʾ al-nabāt*. 2nd edn. Beirut: Dār al-Rāʾid al-ʿArabī, 1981.

・Ullmann, M. *Die Medizin im Islam*. Leiden: E. J. Brill, 1970.

引用が長大であるため，段落終わりで引用が終わっていない場合は鉤括弧を段落末に記載せず、次の段落初めに鉤括弧を付す。

Ⅱ．翻訳

イブン・ズフルの助言

助言のうちには、イブン・ズフル・アンダルスィー Ibn Zuhr al-Andalusī, 名をアブー・アラー Abū al-ʿAlāʾ（1130/31年没）による息子アブー・バクル・ズフル・イブン・ズフルAbū Bakr Zuhr Ibn Zuhrへの助言がある。これをイブン・ムトラーンIbn Muṭrān（1191年没）が『医者たちの庭園』*Bustān al-aṭibbāʾ*で述べて、一部のことについて増補し、「イブン・ズフルによる息子への助言」という言葉で指示している。

「『神を想起することで、平穏は美を与えるものを君に帯同させる。すなわ

しない箇所が多いため、今回は細かく参照しない。

ち、我々のこの時代における大多数の医者は、薬品について［病人の］混質が傾いたのと反対の方向へその傾きの量だけ傾かせる[4]ことをせず、時折過剰に投与して、病人がもっていた病気の反対のものを引き起こしてしまい、またそうなる前には混質の悪化、混乱、能力の不調や減衰を生じさせてしまう。彼らが死の原因を助けてしまう機会はどれだけ多いことか。医者は治療において、必要だと推測して考えたものを下回るものに制限すれば[5]十分である。増大を望むならば、増大させ、怯えて悪い結果を想定しながらたった数日で行っていたことを、安全に確実に何日もかけて増大させて達成するのがよい。医者も時折誤ることがある。病気の原因についてそれが熱性か冷性かを知るときに、冷性だと思ったのに原因が熱性であったり、熱性だと思ったのに原因が冷性であったりするような場合は、誤りを免責される。例えば病人が訴える腸の痛みで、冷たいものが触れると［痛みが］増すにもかかわらず、熱性で黄胆汁質の体液による［ことがある］ように。冷がそれを動かすのは本性が彼にもたらすことのためであり、収斂性で冷たいものは全て痛みを刺激するからである。痛みの原因が熱性であれば全てが緩和するものであり、熱性であれば痛みの強さを打ち壊すのである。』

「［イブン・ムトラーンの］私見。彼の言葉『緩和する』を考察せよ。彼は『加熱する』と言わなかった。なぜなら、状況は普遍的であり、緩和が器官にある質料を少なくするため、消散したものの代替物が戻って多くならなければ安らぎが引き起こされるからである。」[6]そして、より適当で必要な安静を得る。ついには、吸引されればその代わりとなるものを器官が吸引する。そのうちには温い水がある。

彼の言葉「緩和する」を考察せよ[7]。ただし、熱の激しい熱性のものの考察を深々と行うべきではない。というのも、それは緩和するが、分解、蒸発、乾燥、吸引などもするからである。緩和は隠されたままの中程度の熱による

4　校訂版の「yuqbilūna」を『庭園』に沿って「yumayyilūna」に修正して読む。

5　校訂版の「yaqtaṣidu」を『庭園』に沿って「yaqtaṣiru」に修正して読む

6　Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 54, ll. 3–17.

7　前段落の最後と本段落は『庭園』校訂版には欠けているため、シーラーズィー自身の見解と判断する。

ものである。

「師アブー・アラーは言う。

「『痛みの原因が熱性であるとして、医者による薬品の過剰投与の習慣を想像せよ。彼は疾患の原因について誤り、治療において過剰投与し失敗する。どのような困難を彼は病人に課し、どのような痴態を彼自身が晒してしまうだろうか。医者は薬品を第1級の単純薬品あるいは調合した合薬にして、患者のどこにその薬が行くかを考察するだけでよい。それが明らかであれば、もし初日か、2日目か、3日目かに少しだけ効くなら、安全で確実であり、彼の薬品の力は少しであり、その状況は彼の眼前に整っていて、そこから望むものを手に入れることができる。もし医者が失敗を全く怖れないとしても、身体を段階的に平衡へ変えていくことを決断すべきである。冷に当たって便秘になり、そしてその身体を火で一挙に熱しようと考えた人を思い出せ。彼を襲うことは何だろうか。

「『これは強力で明らかで人間に開示されている2つの原因からである。混質が突然に遷移した[8]際に身体を襲う混乱は、稀有な人々以外から怖れられる。というのも、薬品の等級のうち1つの等級の範囲には遷移できる余地があるからである。大きな誤りのうちに、第1級から第2級の最後への直接の遷移がある。私が単純薬品について君に語ったことを対の薬品についても理解せよ。私が1次的能力について、2次的能力について、3次的能力について語ったことを単独と対で理解する必要があるように。下剤は君の想像が向く最も重大なものの1つである。というのも、中庸から逸れたものが毒であるなら、下剤はおよそ致死性であるが、中庸からの逸れの強さにおいて毒に等しく、血管から体液を吸引することにおいて致死性の薬品に等しいからである。［後者と］違うのは、致死性の薬品には身体の実体全体を変化させるもの、血液を排出し、身体全体の本性を成り立たせている血液――これはランプの油のように生命の中心である――を排出することでそれを変化させるものがあるが、安全な下剤は全て体液を排出するものである。君の魂の内で下

8　校訂版の「ta̱taqqul」を『庭園』に沿って「tanaqqul」に修正して読む。

剤に排出の強さと弱さの段階をつけ、［病人に］飲ませる下剤について第1級の最初から最後まで段階をつけよ。それを越えて第2級へ［至る］ことがないように。医者たちが下剤に排出の強さの段階をつけていないとしても、それに自分で段階をつけ、必要なものに縛ることが医者の知恵である。剛毛で肉が堅く強靱な身体の人には全体として第1級の最後に当たる排出をする下剤を飲ませるだけで十分である。それでも、体液が途切れるまで下剤を飲ませてはならない。また、胃を強めるもの、例えば乳香樹脂、アニスの実[9]、ニガヨモギや、腸を害から隠すもの、例えば「マヒーター」――［イブン・ムトラーンの私見］つまりアッシリアプラム[10]――、トラガカントゴム、ピスタチオの種を前もって混ぜずに飲ませてはならない。それは腸を害から隠してそれを断ち、胃を強め、下剤が肝臓を痛めるのを防いでくれる。油もまた、複数の本性が組み合わさっているために良い。アーモンドの仁は下剤の包みであり、それを改善していくらか助ける。時期が暑いなら、切断剤[11]や軟化剤[12]を飲ませた後に下剤を飲ませるだけで十分であり、塩や長コショウのような溶解剤[13]を下剤に混ぜなくてよい。暑い時期にどのように用いるかといえば、水を伴ったり、カンゾウの茎やナツメを多くして用いる。ナツメは湿らせることで包み［の力］をもつ。というのも、それは特性によって肺や胸への効力があるからである。寒さの中で薬品を飲ませるときは、溶解剤や切断剤が不可欠である。暑さと寒さの中で薬品を飲ませるのは危険であり、必要でなければ避けなければならない。寒さの中では体液の硬化のためである。暑さの中では乾の過剰のためである。というのも、血液性の体液が排出されるとともに、身体の自然な湿が少し排出されてしまうからである。

9　以下、植物の同定については‘Īsā, *Muʿjam*を参考にした。

10　アブー・アラーが活動したアンダルスとイブン・ムトラーンが活動したシリアでは薬品名が異なる。

11　切断剤は、器官の表面およびそれに付着する粘性の体液に浸透して、それらを切断する薬品を指す。

12　軟化剤は、体液を蒸気化させることで分解して、それが入り込んだ場所から取り除く薬品を指す。

13　溶解剤は、身体の外側にある異常に生えた肉などを溶解して減らす薬品を指す。

そのため、下剤を多くすることは身体を消耗させるのである。

「『器官の強化を怠ってはならないと覚えておけ。乾燥したとき以外の平衡なときにそれらを熱する[14]必要があるなら、その乾燥は少しの痛みを生じる。というのも、器官、特にそれらのうち主要なものにおいてそれを怠れば患者は破滅してしまうからである。

「『実体の特性を覚えておけ。酢は薬品を脾臓に届け、ハチミツと砂糖はそれを肝臓に届け、砂糖は胃と膀胱により適していることを忘れないように。カンゾウの茎は人間の混質に似た特性をもつので、そのことを軽視しないように。ナツメはそこに隠された湿のために肺と似ており、それに［より適している］ことを覚えておけ。この理由から、酢が薬品を脾臓に届けるのは、脾臓を座とする黒胆汁のもつ酸っぱさに似た酸っぱさをもつためである。甘さも同様に肝臓に関して作用する。なぜなら、血液は甘いからである。膀胱にカンゾウの茎が適しているのは、そこを通る尿の鋭さを鎮めるからである。ノラニンジンは薬品が腎臓に行くのを速める。なぜなら、尿を流れさせ、［腎臓が］これを喜ぶからである。

「『サソリはその特性によって同様に［腎臓を］害し、薬品がその方向へ行くのを速める。それがほんの少しであれば、［サソリが］変化した後でしか届かないので薬品は残り、その害からの影響はない。ツチハンミョウも同様である。サソリがツチハンミョウの反対であり、両者がこれらの器官を害することは否定されない。というのも、これらはその混質ではなく、その実体のもつ特性によってそのように作用するからである。

「『知るべし。下剤は洗われる度にその排出［の効力］が減少し、粉砕される度に排出するより死なせることに適するようになる。安全になれば利尿するようになる。収斂剤[15]は洗われる度にその保持作用が増す。』」[16]

私見。つまり、本性のためにである[17]。「『それは粉砕される度にその作用

14　校訂版の「tasḫīf」を『庭園』に沿って「tasḫīn」に修正して読む。

15　収斂剤は、器官に部分の収斂を過剰に生じさせ、その場所を濃密にして流路を塞ぐ薬品を指す。

16　Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 54, l. 18–56, l. 24.

17　『庭園』校訂版には該当する記述がない。

が多くなり、そのため尿が留められて増加するということである。痛みの鎮静――内的あるいは外的な原因の何れからでも――を望むときは、薬品は温めて使用せよ。というのも、熱はそれを器官へ運ぶからである。あるいは温めて飲ませるべきである。排出剤[18]は井戸の水に入れて冷たくしてから、開放剤[19]は熱してから、分解剤[20]は洗浄剤[21]より少し熱くしてから［用いるべき］である。

「『頭を浄化するために下剤を飲ませるときは、熱した水に入れ、［そして］それに干しブドウを煮たか、あるいは少しのロブ[22]を混ぜた少しの水を混ぜてから［飲ませよ］。』

「［イブン・ムトラーンの］私見。彼はブドウのロブを意図している。

「［アブー・アラー］曰く。『それを飲ませる前に4日待つように。閉塞の開放を望むときはそれを熱して使用せよ。気絶を恐れるときは冷たい水で飲ませよ。腫瘍には抑制剤[23]を使用し、その後にそれに分解剤を混ぜ――分解剤は少しだけにせよ――、最後に分解剤を抑制剤より多く[24]せよ。開放を望むなら器官を水やハチミツなど洗浄するもので洗うべし。耳ではドングリの皮と少しのラベンダーとカモミールの蒸気を煮た酢蜜剤で［洗うべし］。これは耳の痛みを鎮静するためである。痛みが腫瘍のところにあればカモミールの油をバラの油と共に滴下せよ。［痛みが］蒸気状の風からであればカモミールの蒸気と沈香の煙で十分である。耳の薬のうちには、私が述べたように［ドングリの］皮、バラ、カモミール、ディル、酢蜜剤があり、これらは

18　校訂版の「dābiġ」を『庭園』に沿って「dāfiʿ」に修正して読む。排出剤は、身体の外側にある体液を内側に排出する薬品を指す。

19　開放剤は、脈管の内部に入り込んだ質料を外に動かして、流路を開放する薬品を指す。

20　分解剤は、軟化剤（注12）と同様である。

21　洗浄剤は、粘性や硬化した湿を器官の表面の細孔から動かし、器官を洗浄する薬品を指す。

22　ロブは果汁などの液体を煮詰めて濃厚にしたものである。

23　抑制剤は、器官に冷を生じてその細孔を狭め、吸引する熱を壊して、体液が器官に流れ込むのを抑制する薬品を指す。

24　『庭園』に沿って、「akṯar」を補って読む。

特性をもつ。［これらを］単独で、あるいは添加して使用せよ。

「『マグレブの大都市の1つマラケシュの住民には、肝臓周りに非常に激しい痛みが起こり、それに黄疸が続くことが多い。君はそれが肝臓にあると思わないように。というのも、［肝臓には］感覚能力がないからである。それは、それに隣接する神経質の実体にある。それが君と護衛する御方である神の前に起こるときは速やかに瀉血し、甘いものを控えさせ、ノラニンジンとネナシカズラの煮汁を飲ませよ。時間に応じて、また患者から現れるものに応じてそれぞれを行い、まず最初にカモミールとスイセンの煮汁で患部に温湿布をせよ。痛みが鎮まったら温めたワサビノキの油を患部に塗り、スカンモニアで黄胆汁の排出を始めよ。』」[25]

「『その街ではカタルが多いので、彼らに竜涎香とラブダナムとサンダラックを嗅がせよ。空気がそれほど寒くなければ頭への粉薬にニクズクとレモングラスとセイロンニッケイを入れる。空気が激しく寒ければメグサハッカが必要である。

「『そこでは両腿とその間に腫瘍ができることが多い。病人がこの疾患に罹ったとき、体液が注がれて流れている状態でまだ止まっていなければ、腫瘍を引き起こす体液を下剤によって身体から排出し、アカシアなど抑制するものを患部に与えよ。既に止まっていれば、その抑制を試み、瀉血によって共通して身体から排出する。止まったものが身体の下方にあれば、下剤によって排出するのではなく、それ以外のものを動かしてそこに注ぎ込むようにして、腫れている器官が動くのを防ぐように。しかし穏やかにせよ。それらの街の人々は結石の病気に襲われることが多い。これは尿の土性の沈殿物が蓄積されたものによって起こる。結石の薬品は多く、周知であり、カンショウ、マハレブ、タカサブロウ、スイカの種、ユダヤ教徒の石などである。これらを述べるにはこの場所は足りない。切断するものに狙いを定め、強く熱するものと激しく乾かすものに注意せよ。このような種類の薬品を必要とするときはスイカの種で覆うようにせよ。』

25　Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 56, l. 24–57, l. 17.

「［イブン・ムトラーンの］私見。つまり、彼が述べたものによって矯正して、その害を防げということである。

「『カンゾウの茎とスミミザクラの樹脂は有効であり、それに関して安全である。血液は必要となる場合以外では排出しないように。既に体液が腐敗を始めており強く必要となる場合以外では、平衡でない者に下剤を飲ませないように。というのも、それは出て行ってくれず、患者を害するものをその排出によって排出しないからである。本性が分利の過程を終わらせたがっているのを見たときはそれを助けよ。急性の病気では、既に混乱が始まっているときに体液を排出しても問題ない。というのも、体液はその希薄さのために速やかに出て行くからである。

「『腐敗熱において冷たい水が体液に生じさせ、継続する燃焼性の発熱のとき以外では起こらない未熟を覚えておけ。これは恐るべき重大な事柄である。

「『マラケシュの空気は乾燥している。そこでは消耗症が起こることが多い。君が［それが起こると］恐れる者には、平衡な空気に置いた桶の中で温かい真水による入浴をさせることを控えるな。水とバラの油を塗ることはその人に起こることに効く。

「『空気の乾のために咳が生じることがあり、それにはキュウリの果肉、「ファックース」――つまりヘビメロン――、「ドゥッラーウ」――つまりスイカ――、アシを嗅がせるしかないことを知るべし。また、薬品のシロップの水には1ディルハムの砂糖を混ぜること、［皮を］剥いて洗ったカンゾウの茎を口の中に留めておくことを知るべし。』」

そして曰く。「［イブン・ムトラーンの］私見。［アブー・アラーの］言葉『洗った』を考察せよ。なぜなら、洗うことで湿が増すからである。『今は、咳の原因について指摘すべき時である。咳は、肺の実体にある害のため、そこでの混質の悪化、その空間の中でその物質に付着しその道を塞ぐ質料のため、そこにあって［肺を］乱す混質の悪化のため、吸い込まれた空気から被った混質の悪化のため、外から胸を襲いその性質が肺に到達するような冷のために［起こる］。要するに、全ての内あるいは外から被る強力な混質の

悪化からである。』」[26]

「『[咳で] 肺が裂けてしまい、病人が免れ得ないことに陥ることは多い。同様にして、原因の排除に努める限り、咳の治療と症状の緩和は急がねばならない。咳は、胃が充満しているかそこに腫瘍があるために肺を圧迫するためか、横隔膜か膜の一方に腫瘍があるときに［それらを］、あるいは肝臓か脾臓を圧迫するために起こる。いかなる種であれ膨張が過剰になるとき、水腫性の膨張のために起こる。頭から肺へ流れ込むもの、あるいは［肺の］方へ諸器官から下りるもののために起こる。経験を積んだ者にとって最も奇妙な咳の原因には、体液が内側へ傾いている場合に起こるものがある。これは稀に、過剰に恐怖する者、あるいは寒い空気の中で着込んでいたのに裸になった者に起こる。また、背中に固く重いものを［乗せて］持ち上げた場合に起こる。というのも、血管が圧迫されて血液が身体の内側へ戻るからである。また平たい[27]布団に慣れた者に固い場所で起こること、鎧を着ることで血管が外側から圧迫されたことから起こること、東方で生じることのように空気が腐ったところを通るものから起こることがある。2つの原因[28]、つまり混質の悪化と体液の内側への流入を除いて、これらの原因は全て一般の医者が知っている。

「『乾燥した街では痔疾の膨張[29]が起こることが多い。長引けば、体力の消散、水腫、多くの病気が生じる。その発生の最初に治療を躊躇すべきではない。その期間が長引き慢性となったときにそれを切るべきではないのと同じである。そうではなく、流れる血液が少しずつになるようにして、本性を野菜やスカンモニアによって軟らかくし、赤くなるまでラベンダーを煮た水と少しのカモミールによる周知の浄めの後で浄めるべきである。その発生の最初には腫瘍を鎮静し、そして収斂作用が非常に強力な薬品を使用せよ。ただし、本性がそれを避けないように、それをゼニアオイの煮汁に浸すようにせ

26 Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 57, l. 19–58, l. 25.

27 『庭園』では「柔らかい」となっている。

28 校訂版の「al-asā」を『庭園』に沿って「illā sababayn」に修正して読む。

29 校訂版の「awdāj」を『庭園』に沿って「arwāḥ」に修正して読む。

よ。

「『痔疾の膨張[30]がある者にはそれを動かす薬品を飲ませないように。その薬品には鎮静するものを混ぜよ。そして彼には周知の浄めの後で毎回、私が説明する薬品の全てによって浄めるよう命ぜよ。それはウスベニタチアオイの種、カモミール、ゼニアオイである。それぞれから1単位ずつ取り、その全体が浸るほどの真水で、水の様子が全体的に変わるまで煮て、体液の鋭さのためにそれを温めて浄める。というのも、それは尻を、特にそこの［症状を］訴える者にとって、刺激するからである。

「『［次のことを］覚えておけ。薬品については誰もが知っており、失敗はその利用方法にある。［例えば］あるものは薬品を良く挽き、優しさを増すために酢と共に使用する必要がある。あるものは粗挽きにして、濃厚にするために油や蝋[31]と混ぜて使用する。あるものは油で使用する。あるものは器官に注ぐ。あるものはオオバコの種のようにまるごと使用する。これはよく知られたものである。なぜなら、それを挽くと、剥がし死なせるようになるからである。［ただし、］挽くことで生じるこの害を効用に変換するために挽くことがある。例えば鼻血の薬や、大怪我からの出血を断つ薬品に混ぜる。あるものは粉にして使用する。あるものは、水性の実体のものの粉を頭の前方に何度も［使用する］ように、練ってから使用する。これらは全て書物に記録されている。つまり、［これらは］そこから出て帰着する言葉である。

「『ハチミツは[32]それが助けになるのでその泡を排除せずに使うことが多い。薬品は互いに働き合うように反復する性質を与えるため、またその全体から生じた性質を矯正するために挽いて使用することが多い。飲み物はその力が頭に到達するのを助けるために泡立つまで放置されることが多い。腐敗は我々が必要とする開放剤についての助けとなることがある。開放はものの援助の1つであることを理解せよ。排出を生じるものによる切断を意図するとき、我々は下剤による助けを求めることがある。発熱に冒され、その湿が

30　注29と同様。

31　『庭園』では「樹脂」となっている。

32　『庭園』に沿って「al-ʻasal」を補って読む。

溶けて、下剤によって排除された若者を想像せよ。私はその治療において、彼を冷水に浸すことと同等のものを知らない。あるいは暑い空気［の中で］その熱が［身体の］外側に現れたためにその身体の内側が冷えてしまい、食べ物を消化できなくなっている身体が細い男について、治療の方法はどのようなものか想像せよ。我々にとって彼に冷水を注ぐ以上に好ましいものは無い。

「『また、下剤を飲まされて、空気が寒いときにその薬品が濃厚な体液に出会い、圧迫感、混乱、腸と胃の痛みに襲われた者を想像せよ。［彼を］衣服で包むと排出が止まることは人々にとって周知である。しかし、私が述べたことは私によるものなので、医者はこの男を風呂に入れて熱い水の桶に浸す以外の手段をもたない。というのも、それを彼に行うと、その腹は解放され、その体液は体外へ出てくれて、痛みと圧迫感から気が休まるからである。

「『空気が寒く、その身体の体液が薄くなっているときに薬品を飲まされ、そしてその薬品を過剰にして、［彼の］体力が弱まり、排出が増した者を想像せよ。彼は熱い桶に入れるしかなくなる。というのも、［そうすれば］排出がなくなるからである。第1に、風呂がその体液を溶かして解放するからである。第2に、水の熱さがそれらを身体の外側へ吸引し、排出がなくなるからである。1つの原因が2つの相異なる身体に2つの反対の現象を引き起こしうることは否定できない。

「『バラのシロップと酢蜜剤とスイレンを考察せよ。というのも、それが熱を鎮めること、その一部は濃密化し[33]、一部は希薄化し、一部は緩和し、一部は濃厚にすること、それらの全てが冷却することについて人々は合意している。［しかし、］それらは熱を増やし、それを点火することが多い。熱に少し逸れた混質のために、これらの飲み物を個別にあるいはまとめて飲ませることを想像せよ。これら全てが冷却することを誰も疑わない。

「『混質が熱性で[34]、肝臓が乾いており、シリウスが昇るときに燃焼性の発

33　校訂版の「yukayyifu」を「yukaṯṯifu」に修正して読む。

34　校訂版の「ḥādd」を『庭園』に沿って「ḥārr」に修正して読む。

熱に罹り、それが身体全体に進行した男がおり、君が彼にこれらの飲み物を単独であるいはまとめて飲ませたと想像せよ。すると君は、その身体の熱が以前より増大しており、また黄胆汁質の体液への転換に熱が適しているために、［その身体の熱が］これらの飲み物によって何倍も燃え上がったのを見るだろう。というのも、甘さと苦さの間には段階がないからである。』」[35]

「『磁石が鉄を引き寄せるのはその混質が鉄の混質に似ているからではない。酢がそれを嫌う石から逃げるのはその混質が後者の混質と異なるからではないことを知るべし。両者ともその実体に応じたものである。これらは知られていないので「特性的」と呼ばれる。実体の作用からのものは全て、作用が完全であり、能力によるものより多く現れる。

「『藁が空気に満ちているため、火がそれに為す火への速やかな変容を想像せよ。強力な病気においての決断は、病気が混質あるいは実体と一致しているのに応じてである。』医者は実体の考慮を怠ってはならない。というのも、それは大きく影響するからである。[36]

「『下剤のうちには、人々の一部の個人には影響せず、その力においてそれらの［本来の力］以下の影響しかないものがあることを覚えておけ。薬品を飲ませたのに影響が現れないことによってこのことが君に起こったときは、それを増やしてはならない。別のものを近くの日時あるいは何日か後に飲ませよ。薬品を飲ませる者にはその前に晩餐を禁じることを覚えておけ。食べ物はそこから実際に黄胆汁や黒胆汁や粘液が生じるものではなく、その段階には及ばない。しかし、薬品を飲ませるとき、本性はそれらの消化から離れ、［これらの体液を］外へ行かせないので、［それらが］留まり、腸の道が閉ざされるのである。同様に、着物の洗濯が為すことと似たことが器官には為されるため、それ以前には不可能ではなかったことが不可能になる。君はこのことをそれらに1度か2度もたらす。同様に、栄養は薬品を摂る前後には優しいものにすべきである。

35　Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 58, l. 27–61, l. 4.

36　本段落の最後の文章は『庭園』には見つからない。

薬品の中での麝香の使用で探求されること、それにはある点で危険がある

「『薬品の中の麝香には、憶測的な事柄の誤りがある。人々はこれを、共通に器官を、特別に頭を強めるために行う。しかし彼らは、それが主要器官に達したとき、それが体液を排出しそれ自体で［それら器官を］強めるのと同様に、それが担う下剤の力によってそれらを弱めることを忘れている。特に本性から遠い薬品の場合は［そうである］。時折、主要器官のいずれかが弱く、死や破滅から安全でないことがあるのである。

物品の特性の研究

「『同様にブドウ酒について、人々の多くは頭の体液と共に昇ってくるものを下げるために、それで下剤を飲ませる。そこから生起する害はそれが禁忌であるということ以上に多い。もしそれが有効だとしても、下剤と複合することを私は禁じる。医者は下剤を、少し泡立ち始めたくらいの水で飲ませて満足すべきである。ブドウのロブにはそれが充分なだけ含まれている。

「『ソラマメの実体がもつ、脳を混乱させ理性を破壊する特性を覚えておけ。アロエには胃を害する特性があること、ミロバランには胃に効く特性があること、コロシントには肝臓を害する特性があること、セイヨウナシには渇きを断つ特性が、ビューグロスには黒胆汁質の体液を崩壊させその影響を消去する特性があること、竜涎香には肝臓の弱さを生じる特性があること、イチジクにはシラミを生じる特性があること、クルミには言葉に沈黙と吃音を生じる特性があることを覚えておけ。これはその実体全体と混質全体でこの作用を為す。もし時間が限られていて動きを急ぐのでなければ、それは明確に曝かれるだろう。また、ザクロには体液の腐敗や悪い変化を防ぐ特性があること、干しブドウには熟成させる特性があるのと同様であることを記憶せよ。ただし熟成と言っても、それは粘液の血液への熟成のように改善へ向かうような、あるいは血液の腐敗への熟成のように破壊へ向かうような全ての熟成だと受け取ってはならない。そうではなく、治療と成功の過程で理解すべきである。それは体液の持ち主により有効なものへと体液を向かわせるのである。

「『アーモンドには脳の実体を保護する特性があることを知るべし。ゴマには、その混質がそれに近いにもかかわらず、脳を変容させて頭と髄を余剰物で満たし、器官を変容させ、口を香りづけ、汗を臭わせ、女を不妊にする特性があり、時折水瘤を生じ、腹部を大きくする、要するにそれは悪化させるものであることを知るべし。アーモンドについては、器官を保護し、その湿を素晴らしく保護し、異質な湿を生じることなく、器官がそれを保持するように保護する。バラ、特にロブにしたものには肺を保護する特性があること、ナツメはその混質と実体によって肺に効くことを知るべし。

「ライハーン」の効用、それがギンバイカであること

「『「ライハーン」は魂を確固にし、器官を強め、［他の］全ての薬品より多く排出を断つことを知るべし。これはつまりギンバイカである。収斂性の全てのものは物質を排出する力があること、排出する全てのものは収斂によって保持する力があることを覚えておけ。ただし、ギンバイカには排出する力がない。

「『沈香が胃を強めてそれに効くこと、それが口の臭いを消すことを覚えておけ。その混質はモモの混質から遠く、両者は確実に蒸気を断つことを覚えておけ。アーティチョークは身体の汚れた部位の臭いを放つことを覚えておけ。スイセンを嗅ぐと子供の頭痛が取り除かれることを覚えておけ。私が何度も考察した後で試すと、それを嗅ぐと、ガレノスがシャクヤクについて述べたことになると分かった。スカンモニアを多く飲ませると保持されること、コロシントの脂肪は人々が主張するのと異なり、その包み[37]はトラガカントゴムではないこと、ピスタチオの種はトラガカントゴムより適切で、アーモンドの仁はそれより良いことを覚えておけ。これらは考察した後で私が経験したことである。コロシントをそれらと共に使用せよ。

「『コロシントとヘレボルスの包みは――君の祖父が［その父から］[38]伝えるところによると――スイレンの花であり、アーモンドの油はそれに良いこ

37　校訂版の「mujābu-hu」を『庭園』に沿って「ḥijāb-hu」に修正して読む。
38　『庭園』から補う。

とを覚えておけ。決定的なのはスイレンとアーモンドの油でそれを覆うことである。

「『私は私の頭に浮かんだ事柄を少しだけ述べ、それを君に託した。その中にある備忘や指示には、君が前もって読んで慣れて目撃したことで十分だと私が期待することがある。私が君にさせたいことは、神の御力によって君が届ける下剤の飲み物をどれだけ飲ませるべきか、どのように飲ませるべきかを述べることしか残っていない。私は君に前置きをして、喩えを述べよう。医者は男に、下剤はランプに、身体はその中に亜麻布がある家に当たる。男がランプを手にして警戒しながら［家に］入るなら、今にも解放され、家は燃えないだろう。傲慢に嘲りながら、落ち着いて全てのものを信頼して入るなら、家の安全は近くない。私は君のために神にかけて誓おう。私は飲ませる前に何日も後に何日も思考を巡らせなければ下剤を飲ませない。なぜなら、それは毒だからである。毒を管理し、毒による効用を求めてそれを飲ませる者はどのような状態にあるべきだろうか。警戒しながら、そして神に呼びかけて献身して頼りながらしかない。』」[39]

下剤の目方と分量の説明で探求されること

「『私は分量について述べ始めよう。コロシントを半ウキア[40]、ミロバランを半ウキア、オオエゾデンダを1ウキア、ニオイスミレの花1ディルハムを煮たそれと同量［1ウキア］の水、クローブを半ディルハム。水は必要な量の倍を［入れ、］水が必要な量に戻るように［煮詰めて］、そして濾して、セイタカミロバランを混ぜた後、何らかの飲み物と共に飲ませる。暑い時期なら、ニオイスミレを少しだけ多くして、コウキをいくらか加えよ。暑くなければ、先の通り［追加せずに］である。胃が弱ければ、乳香樹脂、ウイキョウの種をこの全てに加える。現れるものは隠れるものよりよく見える。私は

39 Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 61, l. 13–63, l. 15.

40 1ウキアūqiʾaは12分の1ラトルraṭlに相当する。1ラトルはアブー・アラー・ブン・ズフルの時代のマグレブでは140ディルハムdirhamに相当する（現在の437.5グラムに値する）。Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, 32, 34.

神に請う。神が君を成功させ、君に道を示し、あらゆる場合に君に平穏を伴わせてくださるように。

「『その例は［次の通りである］。1番目の最初は、何れの体液であれ胃の中にあるものを排出し、それと共に便を排出するものである。これは少数の人々だけが気づく。この段階には幅がある。その幅のうちには、胃の実体の中にあるそれが排出することができる体液を排出し、便と共に下りて、大多数の人々がそれに気づくようなものがある。その後で［便を］増やしさらに軟らかくするが、熱い水で流れるもののように、その軟らかさは良く考察しなければ分からない。これは類推を必要とする。

「『2番目は、人間が気づくほどに、より多く排出するものである。愚鈍な人々であっても、便が軟らかくないが増えているならば［気づくだろう］。これには幅[41]があり、その中で増えたり減ったりする。

「『3番目の最初は、人間を悩ませ重荷となるほどの排出を為すものである。弱いうちは、これに別の幅がある。

「『4番目は、強く激しく排出するものである。私は既に例を挙げたので、それを熟考せよ。誰もその道を拓いていなかったなら、寿命が猶予をくれれば、私が神の御助けと御力によってそれを拓いただろう。

医者が習慣としている前提
――神が彼らを支援し続けてくださいますように――

「『それは私が君に［以下で］説明することである。ホウライシダとカンゾウの茎をそれぞれ5ウキア、ノラニンジンの種とレモングラスをそれぞれ1ウキア、ベニバナセンブリを4分の1ウキア、［これらの］薬品を砕いて、20ラトル[42]の水の中に一晩浸し、翌朝に引き上げて弱火にかけ、水が10ラトルに減るようにし、そしてシロップになるまで煮る。それに切断［作用］を加える必要があるときは、それが濃厚になる際に2ラトルの酸味の確かな酸っ

41　校訂版の「ǧaraḍ」を『庭園』に沿って「ʿaraḍ」に修正して読む。次の段落も同様である。

42　注40を見よ。

ぱい酢を入れよ。毎日ここから2ウキア分を5ウキアの温かい水と共に取り、テンサイとローマンネットルの揚げ物で栄養を摂らせる。それが無いときは、あるだけのこれらの野菜にする。その朝にこの薬品を摂る日は、最初の食べ物で栄養を摂らせ、それに制限するのが正解である。その夜は決して食事をさせないように。』

「これが［アブー・アラーの］[43]『助言』として知られる備忘録の最後である。」[44]増補を含んでいるとしても、そこにある利点は隠されていない。これが、彼らが語ったことである。

本研究はJSPS科研費JP20K21920の支援を受けたものである。

43 『庭園』から補う。

44 Ibn al-Muṭrān, *Bustān al-aṭibbāʾ*, 63, l. 17–64, l. 15.